

---

# 100回死んだキミと101回死んだ僕

おたんなすび

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

100回死んだキミと101回死んだ僕

### 【Nコード】

N4181Z

### 【作者名】

おたんこなすび

### 【あらすじ】

早めのインフルエンザで休校が多かったため、クリスマスにも学校に来るはめになった生徒一同。その中で井上は好きなあの子に告白できるのか!?!???

あなたは神様を信じますか？

これには、信じる人とそうでない人が多いだろう。そしてこの物語に出てくる井上隆いのうえたかしは後者の考えを持つ人間である。それは、学校での出来事

「いやー、僕はUFOや宇宙人は信じるよ。でも神様はない。神様はいないよ」

これが井上である。そしてその友達が

「いやUFOや宇宙人を信じれるのになんで神様は信じれないんだ？おかしいじゃないか！！！」

これが前橋まえはしかずき一樹である。二人は今登校途中に神様の存在について話しているところだ。

ペチャクチャしゃべっていたら前橋は急に

「んで隆はどうすんの？エリカちゃんにあげるクリスマスプレゼントは持ってきたか・・・？」

「・・・そんなもんあるわけないじゃないか」

井上には、幼馴染の川崎かわさきエリカという女の子がいる。とてもかわいい子で井上は川崎のことが好きだが告白はまだしていない。高校ではおそらく同じにはなれないらしい。

「お前今年で俺たち最後なんだからよ。最後には散るか咲かすか散るかしようぜ？」

「散るが二つになってるけど？」

「俺とお前で二人分だ。わっはっはっは！！！！」

早めのインフルエンザで休みが大量発生した分、休校が多かったこの学校ではクリスマスに学校という最悪な予定が入ってしまったため、今井上と前橋は学校についてしまうわけであったが……。

「あつ、おはよう。井上君に前原君!!」

明るく声をかけてきたのは、井上が好きになっているという川崎だ。

「おっーす!!（前橋だけど）」

井上は固まっている。

「あつおいここで告うちまえよ!!」とかなんかを前橋が井上に突っ込んでいるのだが、井上は固まっている。

「……やつ、やああ。キミは相変わらず元気だねアハハハハハ。今日はいい天気だよねアハハハハ。」

だめだこいつと想着てしまう前橋だが

「うん!!それじゃあまたあとでね!!」と、だけいって川崎は教室のほうにいつてしまった。

「おっ、おい井上おまえな……」

井上は固まっていた。

そして、授業が終わった井上はまだ教室でSTをしている前橋を待っていた。しかし、いつまでたっても終わらないので、屋上にある自動販売機であっただかいコーヒーでも買おうとしたときだった。

「あつ、またあつたね井上君」

屋上には川崎がいた。しかも見る限り一人でいる。

「……あつ、ああああ、どうした……の？こ、こここんなに寒いところで」

「私はコーヒー買いにきたんだけど……どうしたの？寒くて声が震えてるよ？」

「いつ……いやそうじゃなくてさ（キミがいるからだよ！！）」

「……井上君は好きな人とかいるの？」

「……えっ？」

井上にとってこんなことは初めてだった。確かに川崎とは幼馴染でもあるからよく話したりはするのだが、こんなことを言われたのは初めてだった。川崎は口をまたひらく。

「私はね……いるんだよ？」

「あつ……ああそうなんだ……」

井上は絶望した。告白もしていない。それに、誰かを好きになっ  
ていることがとてもショックだった。

朝出会った時、言っておけばよかった。けどもうどうにもならない。

川崎が言ってしまったのだから。

「その人はねいつも臆病だったり、自分のことを僕とか言っちゃうんだよ。おかしいでしょ？でもその人はとても優しく話しているとても楽しいの」

「……えっ？ちよつと待てよ……。これってさ……」

「できれば井上君のほうから言っただけだな……。アナタは別に好きな人がいるの？」

「……えっ？いや……。その……」

無論井上は川崎のことが好きだ。でも自分の中にある、何かかひつかかつて言えない。

（おい……。！どうしたんだよ……。どうしてこんな時にくらい「好きです」一言も言えないんだ僕は！向こうは、僕から言ってくれるのを待ってたんだぞ！先に言わせてしまっただけで男らしくないからか……。？いやちがう……。これは……）

臆病。ひっかかる何かとは臆病のことだった。好きだということを知ってから伝えることが、男らしくないとかそんなことじゃない。彼は単純に臆病なだけだったのだ。

「……その様子だといえるらしいね。あーあ残念だよ私ってさー……」

「あついや……。ちが」

川崎が一人で手すりにもたれかかる。

「ちよつと……。一人がいいな……」

「……。ちがうん」

バキツと音が鳴った。井上が否定しようとしたその瞬間、防止用の金属でできた手すりが壊れた。もたれかかっていた川崎はそのまま倒れこもつとする。しかし、下には冷たいコンクリートしかない。もちろんそこから落ちれば死あるのみだ。ここは7階生きてても後遺症は残ってしまうだろう。

「「え？」」

川崎は一瞬にして死を悟る。もうここから生きては帰れないと一瞬で感じてしまう。しかし、その瞬間

井上が川崎の手を掴んだ。それも超ギリギリの状態だ。ガツシヤーン！！と落ちた手すりが音を立てて粉碎した。相当錆びていたのだろう。まだ壊れてないが、錆びてボロボロの手すりを掴みながら井上は叫ぶ。

「・・・・・・・・ちがうんだ！！！！聞いてくれ川崎！！僕は君の事が大好きなんだ！！キミが知ってる通り僕は臆病だから！！だからちよつと言つのが遅かっただけなんだ！！幼馴染だろう！！それくらいわかってくれよ！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

川崎は今にも死にそうな状態で、反面泣いていてもう反面は喜んでいるようにも見える。井上は川崎に問う。

「聞かせてほしいんだけど・・・・・・・・僕のどこがいいんだい？」  
「それはね

バキバキツと、手すりが壊れそうな音が鳴り始めた。必死で川崎

を引き上げようとする井上だが、なかなか上がらない。

「もうやめて。アナタはここで死ぬべきじゃないもの。」

「いやだ！放したくないよ！！」

「ううん。もついいの」

「いやだ。絶対にキミは死なせない！！手を放そうとするな！！」

ゆつくりと手を解いていく川崎。そして彼女は井上の手から離れてしまった……。0.001秒が5秒に思えるほど井上には見えてしまった。その5秒の世界で井上は考え、行動に移した！！

(いやだ、死なせない！！絶対に助けてみせる！！)

井上は飛び降り、川崎に抱きつく。落ちていく数秒の間に川崎は井上に問う。どうしてこんなことするの？と井上は答える。それはキミが僕のことを好きで僕もキミのことが大好きだったからさ、と。

下に落ちた瞬間、ポーツと空を見上げる井上。雪が降っていた。

「アハハハハハ……。今日は……。いい……。て……。んき……。だよ……。ね」

二人は真っ赤に染まり、死んでいた。

二人はこれで100回目の死を迎えることになる。そして物語はここから始まる。



(後書き)

感想・誤字発見等があったら教えてほしいです。よろしく願います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4181z/>

---

100回死んだキミと101回死んだ僕

2011年12月14日15時49分発行